

「ツァツォス＝セフェリス論争」について -セフェリス「アシネーの王」との関連から-

伊藤 照夫

I

1930年代の10年間は、ギリシア現代詩にとって重要であることは言うまでもないが、それは従来の詩を一新させる詩人たちを世に出したためだけではない。その理論化への活力と評論活動を可能にし、発展させたからでもある。当時の詩壇を代表するパラマスは、1933年にかれの理論的な著作として最も重要な『わが詩論』*Ἡ ποιητική μου*を出し、30年代以前の詩について包括的な論評を試みている。しかし、それはまたソロモスを始祖にする時代の白鳥の歌でもあった。1935年には雑誌『新文学』*Νέα Γράμματα*が発刊され、その創刊号にディマラスの「詩に関する7章」*Ἑπτὰ κεφάλαια γιὰ τὴν ποίηση*が掲載され、パラマスとその亜流から離脱して新しい詩への文学運動をいわば理論化するような役割を負うことになる。そして1936年の7月に、セフェリスはT.S.エリオットの『荒地』の翻訳を世に問う。これには「T.S.エリオット序説」*Εἰσαγωγή στὸν Θ.Σ. Ἐλιοτ*と題された長大なエッセイが訳者によって書きそえられているが、それはエリオット論にとどまらず、セフェリスの詩論と評論活動への序説ともなっている⁽¹⁾。かれはエリオットから批判するための「新しい感覚」*μιά νέα εὐαίσθησία*を学びとるや、最初の再発見者パラマスから15年後にカルヴォスを論じ、近代ギリシアの言葉とエートスをマクリヤニスに発見し、『エロトクリトス』の詩法を検証することになるが、自らの新しい感覚と理論を総括する機会が1938年の春にめぐってくる。

セフェリスの妹ヨアナの夫でアテネ大学の法哲学の教授であったコンスタンディノス・ツァツォス⁽²⁾は、1938年4月に刊行された雑誌『プロピレア』*Προπύλαια*に「出発の前に」*Πρὶν ἀπὸ τὸ ξεκίνημα*という青少年の健全な教育を論じるエッセイを発表した。これはもちろん芸術論でもないし、いわんや文学評論などではない。セフェリスに言わせれば、「有能な精神的個性

を完成させるため⁽³⁾」の前提条件となるものについて論じているが、その全体の5分の1ほどが詩について、また現代ギリシア文学の前衛運動に言及している。当時とりわけ前衛的な詩人と見られていたセフェリスは、同じ1938年の『新文学』8-9号に「詩についての対話」Διάλογος πάνω στην ποίησηを載せてツァツォスの現代詩に関する論点を検討し、それに反論する。かれが問題視したのは、次の2点に集約される。(1)現代詩における「論理的(合理的)」及び「非論理的(非合理的)」本質 τὸ ἔλλογο καὶ ἄλογο στοιχεῖο または意味の論理的な一貫性。(2)芸術、とくに詩における ἑλληνικότητα (ギリシア民族の感性に根ざした芸術的美的原理)。この2つの論点は以後複雑に拡大する対話においても不変の中心的な主題でありつづける。セフェリスの論評にたいして、ツァツォスは同年の『プロピレア』10-12月号に「詩についてのひとつの対話」“Ενας διάλογος για τήν ποίησηという長編エッセイを出し、論点をありあまるほどに拡大するが主張を変えようとしなない。セフェリスはこれに応じて翌1939年の『新文学』1-3号に「詩についての第2の対話、または独白」Δεύτερος διάλογος ἢ μονόλογος πάνω στην ποίησηを發表し、拡大されたテーマを追いつづけることになる。同年の『プロピレア』1-2月号には、ツァツォスの「ある対話の報告書」'Απολογισμὸς ἐνὸς διαλόγουが掲載される。最後にふたりの共同執筆で「ある対話の終結」Τὸ τέλος ἐνὸς διαλόγουを『新文学』1939年7-12月号に發表して、1938年4月から1939年12月までの対話にピリオドを打ったのである。進行するにつれて論点が拡大し、内容も多岐にわたり、それらが複雑に交錯するこの対話というよりむしろ論争は、あまり明快には噛みあわないままに終わってしまった。セフェリスがすべての点で詩人であり、ツァツォスがカントを信奉する哲学者であり、法と政治の理論を探求する学者であることからすれば、このような結末もあるいは当然のことであったのかもしれない。そしてこのような両者の立場が平行線のように交差するものではないければ、この論争の内包する意味もさほど注目するに値しなかったのではないだろうか。セフェリスが『荒地』の翻訳を出した同じ1936年にツァツォスはパラマスに関するモノグラフを刊行しているのである⁽⁴⁾。そこから知られるのは、かれが徹底した「パラマス主義者」であることと、パラマスへの心酔ぶりの裏返しとしてのヨーロッパ・モダニズムを拒否するかれの態度にほかならない。シュルレアリスムの強烈な影響下にある「30年代派」の「新詩」と、ソロモス以来の伝統の頂点に立つパラマスに代表される「旧詩」との対話を実現させたのが「ツァツォス=セフェリス論争」であると言えよう。このふたりの立場が直截的に交差するとすれば、前述の2つの論点しかないのである。

1930年当時、カヴァフィスもシケリアノスも存命中であったが、パラマスこそがなお依然としてギリシア詩界の巨人であった。かれの作品の価値とそれに対する信頼は、時代の流行といったものに無関係であった。そのような流行よりもさらに重要な近代ギリシア詩の伝統が花を咲かせ、実を結んでいるのは、パラマスを措いてほかにはあり得ないと見なされていたのである。カヴァフィスは、まだ無名で知られていない。シケリアノスは、ちょうどこの時期にかれの *τις Δελφικές προσπάθειες* にすべてを投げ出している。しかし1931年にセフェリスの第一詩集『転回点』が現れ、パラマスからの離脱が準備され、1935年に雑誌『新文学』が出るに及んでパラマスの時代は事実上終わるのである。そうであれば、カリオタキスのあの惨めな結末（1928年）にはどのような意味があるのであろうか。文学史から見れば、セフェリスや「30年代派」におけるパラマスからの離脱と古びた詩（旧詩）からの離脱とを、円滑にかつ正常に用意した橋渡しの役がカリオタキスには与えられよう。たしかにかれにも古いものと新しいものがかなりの程度に混在することは⁽⁵⁾事実であるにせよ、鋭い感覚と諷刺とユーモアの精神においては、まさしくモダニズムの先端を疾駆する詩人であった。同時に、かれはパラマスのとりわけ《*Σατιρικά Γυμνάσματα*》の後継者であるとするれば、かれ自身の《*Ἐλεγεία καὶ Σάπρες*》は、セフェリスのたとえば《*Θεατρῖνοι, Μ.Α.*》（『航海日誌II』所収）の直系の始祖と言えるかもしれない⁽⁶⁾。しかしながらカリオタキスの自殺は、詩の不変の価値への信頼を犯すものとして当時の知識人から公然と非難され、詩人として抹殺されかねないほどであった。その3年後に『転回点』とともにセフェリスが詩壇に登場することは、サティリスト詩人カリオタキスのニヒリズムから転回して、ギリシア民族が現に生きている伝統へ回帰する予兆となる。そしてセフェリスが時代のヒーローとなるや、カリオタキスはアンティ・ヒーローとして併立させられざるを得なかったのである⁽⁷⁾。

時代のヒーローであるセフェリスを、老大家パラマスが十分に理解できなかったのはやむを得なかったことかもしれない。1931年にパラマスが雑誌『新ヘスティア』*Néa Ἑστία* 10月号に掲載した『転回点』にたいするかれの書簡は、この詩集への無理解ぶりを明瞭にさらけ出している。同時にセフェリスへの批判は、大家の新人にたいする寛大さからか、あるいは理解できないという気おくれからか、とにかくいささか遠慮しているような慎重さのために鋭さと精彩を欠き、ヒーローに一歩も二歩も譲ったように見える。そし

てまさにこのパラマスの書簡に強く刺激されて、ツァツォスは同時代の詩壇の動向に一石を投じることを決意したのである。しかもパラマスの『転回点』にたいする遠慮がちな慎重さにあきたらなく思い、「新詩」への攻撃を開始したとも考えられている⁽⁸⁾。

しかしセフェリスにとっては、論争の相手はツァツォスよりむしろパラマスではなかったのであろうか。ツァツォスの論拠は、すべてパラマスからの借り物と言ってよい。詩における非論理性（非合理性）の問題は、両者の相違し対立するポイントであり、「新詩」と「旧詩」の相違し対立する主要なポイントでもあるけれども、これ以前にすでにパラマスによって「純粹詩」*poésie pure*に関する一連の論考で触れられているのである。ただかれの場合、このテーマを「音楽」と「論理 *λογική*」という用語で論じている。この「音楽」とは、ヴァレリーの詩またはそれに類する詩のことであるが、かれの中心的な問いは、詩の根本的な要素が感覚 *συναίσθημα* であるのか、論理または言葉 *λόγος* なのか、という点であった。パラマスのこうした問題提起は、ツァツォスとセフェリスの論争にもそのまま再現されるのであるが、パラマスによれば、「音楽」は最も身体的かつ最も自然な非人為的な技法であり、感覚と神経に直接的に訴えかける技巧なのである⁽⁹⁾。伝統的な旧詩の理論的な集大成であるパラマスの『わが詩論』は、当然のことながら、詩は論理的または合理的な意味の一貫性を維持しなければ、それが詩ではあり得ない、というその時代の枢要な美的規範をよりどころにして展開される。若きソロモスにとっても、「精神（知性）がまず力強くとらえねばならない。そして次に熱い心が精神のとらえたすべてを感じとらねばならない⁽¹⁰⁾」のであった。円熟期にあっても、ソロモスは、ドイツの理想主義哲学の影響から、理知的な傾向を著しくしていく。それはパラマスの「詩人はイデーに苦悩し、ロゴスで感覚を制御する⁽¹¹⁾」とほとんど同じと言ってよいし、さらにヴァルナリスに至ってようやく終熄するひとつの時代の流れであった。セフェリスがツァツォスとの論争で挑戦するのもそれであったのだ。

1923年3月27日付の妹ヨアナ宛の手紙で、セフェリスは「私がギリシアの芸術の流れを決められたらと思っている⁽¹²⁾」とパリから書いている。パリ滞在中（1918年-24年）、まずラフォルグを発見して熱中し⁽¹³⁾、折から発展の最中にあつたシュルレアリスムに沈潜する⁽¹⁴⁾。同時にヴァレリーの象徴詩にも強く惹かれていた。ヴァレリーは、シュルレアリストたちから拒絶された詩人であったが、若いセフェリスにはまちががなく驚嘆の的となる。ただ、そのいわゆる「純粹詩」の理論には同調できなかった⁽¹⁵⁾。さらにシュルレアリスムの「自動記述法 (*écriture automatique*)」と「無意識」のヘゲモニー

にたいする懐疑的な態度も、やはり 1930 年代に至るまで変わっていない。エンピリコスによって移植され、エンゴノプロスやエリティス等の手で育まれたギリシアのシュルレアリスムにも一貫して用いられる手法から、セフェリスがいくらか距離をおいているのはツァツォスとの対話においても明らかである。あるいはまたフランスの抒情詩とのかかわりから、セフェリスにとって音楽的な詩または詩の音楽性の問題は、詩と音楽の暗合的な結びつきのテーマと同様に、早くから取り組まねばならないものになっていた。30 年代に至るまでかれの作品は、時として文学よりも音楽（たとえばバッハ、ドビュッシー、ストラヴィンスキー、さらに後にはベートーヴェンも⁽¹⁶⁾）から多くを汲みとっているとさえよう。1921 年 1 月 4 日付のヨアナ宛の手紙などは、こうしたセフェリスの態度を最も率直に表明するもののひとつである⁽¹⁷⁾。1932 年にニジンスキーの振り付けによるストラヴィンスキーの『春の祭典』を見て書かれた散文詩「ニジンスキー」（『練習帳』所収）は、この意味で典型的な作品となる。ここでは、舞踏家と詩人が音楽と詩と同様に渾然と溶融している。そこに当時のセフェリスの詩論を読みとることは可能であろう⁽¹⁸⁾。

III

パラマスは、ドイツのロマン派哲学を継承する理想主義を標榜する立場から、詩の理知的な哲学的な要素を高めることを絶えず求める。そのために詩の音楽性が損われても、ほとんど問題にしなかった。ツァツォスは、このようなパラマスを支持する、それも無条件のパラマス主義者である。無調音楽を擁護するセフェリスにたいして、かれは現代詩の非論理性 τὸ ἄλογο を非難するように、それに呼応して無調音楽に音楽そのものの死を見ようとする⁽¹⁹⁾。現代音楽であれ、現代詩であれ、作品の非論理性または非合理性が人間の認知の機能を阻害するのであり、理解困難という意味での難解さを生むだけであり、そもそも詩人にそのような難解さを読者に押しつける権利があるのだろうか、ツァツォスは主張する。セフェリスは現代詩において難解さを求める権利と資格が詩人にはあると反論し、詩人の権利を擁護する。ただ、その難解さは、もちろんツァツォスの言うような認知によって機能される「意味の論理的な一貫性」を欠くところに生ずるものではない。エリオットのいわゆる 'a kind of alloy' は、いつの時代であれ、どの芸術にも、それぞれの芸術の素材である金属を活性化させ、作用させるために不可欠である⁽²⁰⁾。つまり言葉に磨きをかけ、細工するために現代にとって必要な「合金」は、伝統的な

意味でのロジックだけを包むことはあり得ないのである⁽²¹⁾。したがって、論理的に意味の一貫する詩を主張するツァツォスにむかって、セフェリスはツァツォスの排斥する非論理的な詩ではなく、「質の濃密な」πυκνήかつ「具体的客観的な」ἀντικειμενική 詩の権利を守ろうとする。つまりセフェリスに言わせれば、ἀλογη ποίησηなるものは存在しないのである。こういったことは、すでに「T.S.エリオット序説」で主張されている⁽²²⁾。

「新詩」にたいする「旧詩」の優位を主張するツァツォスを批判しながら、セフェリスはエリオットのコンセプトを用いて両者の対立する関係を一掃しようとする。そのためには、文学評価の先験的な(a priori)規準として、ツァツォスによって持ち込まれた ἐλληνικότητα の閉鎖的な狭いナショナリズムを排除しなければならない。こうして両者の対話は第2の論点へ移っていく。

IV

自己認識または自己確認は、「ギリシア人であることとは何か」あるいは「いかにしてギリシア人であり得るか」というアイデンティティーの問題へつながっていく近代ギリシアにとって避けがたい宿命と言ってよい。古典古代のギリシアにアイデンティティーの根源を求めつつ、近代ヨーロッパ的であらねばならないというディレンマこそ近代ギリシアのかかえる最も危険なものであった。20世紀の開始とともに、国内は先鋭化しつつあった伝統主義者と欧化論者の対立は深刻化するばかりである。とくに「ギリシア精神」ἐλληνισμός のあるべきありかたをめぐって、対立は複雑な社会情勢がからみ、いよいよ錯綜してディレンマに陥るしかない状況となる。とくに1922年の小アジアでの「大破局」は、古代ギリシア文化の伝統の危機を深刻に印象づけ、1928年のカリオタキスの自殺は、社会から遊離したモダニズムの退潮とニヒリズム化を促した。このような時代を背景にして、1930年代のヨーロッパで高等教育を受けた、多くはリベラルで反共産主義的な詩人や評論家のグループ、いわゆる「30年代派」が極度に混迷する状況下で、ヨーロッパ文化を形成する伝統的なヨーロッパ的ヘレニズム（ヨーロッパ化されたἐλληνισμός）の内部に、近代ギリシア的なものを明確に際立たせる特色を打ちこむことによって、つまりギリシア民族の感性に根ざした美的原理（ἐλληνικότητα）を持ち込むことによって、あのディレンマの矛先をかわそうとしたのである。かれらはヨーロッパとの新たな文化的均衡を見出すべき文化運動を展開し、近代ギリシア語への自信とその美しさについてのナショナリズムをもたらした⁽²³⁾。「30年代派」のひとりとしてセフェリスは、『転

回点』でカリオタキス以降のニヒリズムからギリシア人自身が現実に生きる伝統への回帰を示唆する。かれのめざすのは、危機の緩和であり、伝統の再生とその利用である。かれ自身のメタファーによれば、それは「帰郷・帰国」 νόστος である。1935年の『ミスストリマ』でこれが明確に示される。伝統を吟味し、再解釈から新たな形を模索しながら、近代ギリシア文学の狭いナショナリズムの枠と境界を近代ヨーロッパの方向へ拡大しようとする。1938年頃のセフェリスは、ヨーロッパ・モダニズムの実験とコンセプトのいくつかを、ギリシアの伝統が遺したものに慎重に接ぎ木をすることであるディレンマからの危機を克服しつつあった⁽²⁴⁾。ヨーロッパ的ヘレニズムにたいして、「ギリシア的ヘレニズム（近代ギリシア的ギリシア精神）」 ἐλληνικός ἑλληνισμός⁽²⁵⁾を確立するのも、ほぼ同じこの時期にあたる。

ツァツォスは、モダニズムの実験の妥当性と適切さを問題にして、モダニズムの実験的な作品の主題、形式、言語がいかにしてギリシア的であり得るのか、と問いかける。かれは現代ギリシアの文学が外国からの介入なくしてギリシアの土壌に根づくことを要求するのである。そのために文学の評価の先験的規準として ἐλληνικότητα を導入するが、それはかれによればギリシア固有の光の持つ美質、線と輪郭の透明性、有限性の長所を強調するもので、すべてギリシアの土着の美点である。すなわち、土着の美学と称するべきものとなる。しかしセフェリスによれば、ツァツォスのように偏狭な評価規準を排除するためにこそ、ἐλληνικότητα がクローズ・アップされたのである。そして「ギリシア精神（ἑλληνισμός）」のもつどの要素も、外国から流入するものすべてを正當に評価するために貴重なものであり、必要なものであるからには、ἑλληνισμός は門戸を開放し、外国からの流入を受け容れねばならない。ἐλληνικότητα についてまわるナショナリズムから常に一定の距離をおこうとするセフェリスには、これが近代西欧からギリシア民族の現に生きている伝統への回帰のために残された唯一の道なのである。その道の到達地点には、「近代ギリシア的ギリシア精神」がある。

その ἐλληνικός ἑλληνισμός に不変の価値を与え、自らの文学活動の問題をそれに結びあわせることによって、セフェリスはもうひとつの危機、すなわち同時代のギリシアの閉塞的な状況がもたらす絶望的な危機を凌ぐことになる。そのきっかけとなるのがツァツォスとの論争であり、それを立証するのがセフェリスの名を外国にも知らせることになる詩「アシネーの王」である。

1936年8月4日に成立するメタクサス独裁政権のいわゆる「8月4日体制」のもとで、第二次世界大戦の迫り来る足音を聞きながら書きつがれた詩集『航海日誌Ⅰ』は、1940年4月に刊行される。この時すでに世界大戦は始まっていた。ギリシアは当初こそ埠外にあったが、その半年後の10月にイタリアの、さらに翌年の4月にはドイツの攻撃と占領を経験しなければならない。この詩集に外交官として政府の中枢に関与するセフェリスの懸念と予感が現れているとしても、それは当然のことであろう。そこに収められた17篇の詩は、1937年6月から1940年2月までに書かれたものであるが、とりわけ「最後の日⁽²⁶⁾」、「忘却の決定」、「アシネーの王」は、この詩集のもつ雰囲気をも最も濃厚に示すばかりでなく、このような見地から最も重要な詩である。とくに「アシネーの王」は、詩人として絶望的な現実でありながら、詩的創造を問いつづけ、大胆なレトリックを駆使し、詩として破壊寸前に至りながら、詩の可能性を追求するセフェリスを的確に描いている。「近代ギリシア的ギリシア精神」へのひたむきな沈潜とそれへの絶大な信頼を力の源泉として、したたかな、かつ挑発的な態度を時代状況に対して貫き通す詩人の自画像が「アシネーの王」である。この作品は、1938年の夏から1940年2月までの2年間にわたる多くの時間をかけ、苦心を重ねて完成されたもので、セフェリス自身日記や対談で2度もその苦心談を披瀝している⁽²⁷⁾。また、この詩にはセフェリスの手書きの異稿が6種類残されている⁽²⁸⁾が、『航海日誌Ⅰ』で異稿が存在するのは、これ以外に「連帯」、「天使たちは白い」、「忘却の決定」にそれぞれ2種類あるだけで、これほど多くの異稿が残されている作品は、かれの全作品の中でも現在知られる限り他にない。このこともセフェリスのこの作品の完成にかけた意気込みと苦闘のさまを示しているであろう。この詩人の熱意と努力は、同時代のギリシアがおかれている状況にたいするかれの応答である。そして同時に、それはツァツォスとの対話に関する最後の返答でもある。

「アシネーの王」とツァツォス論争との直接の関連を示すものは何もない。ただ、あの論争が1938年4月から翌年12月までのことであり、それが「アシネー王」のための努力の2年間 *Δυὸ χρόνια προσπάθεια* (*Μέρες*, ΣΤ' 55) と一致する同時進行の事件であった、という事実があるだけである。ところで6種類の異稿は、それぞれの使用された用紙のサイズなどから、それぞれのテーマや詩法など個々の作品としての内容から、第1稿から第3稿までのグループと第4稿から第6稿までのグループに分けられ、制作に2つの時間的な

段階があったことは確実である。そして第3稿には「1938年8月」という記入があり、これは現行テキストの制作開始を示す「アシネー、1938年夏」という末尾の付記と合致する。つまり異稿の第1グループのすべてが出そろった時点が現行テキストに着手した時点となる。第1のグループと第2のグループは、内容からまったく別の作品群で、ただタイトルが同じだけであり、第2のグループは、とくに第6稿が現行テキストとほとんど同じである。このことから1938年の夏に「アシネーの王」は一度中断されて第1グループの異稿群が残され、これとはまったく違った視座から構想が練りなおされて⁽²⁹⁾第2グループの異稿群を経て現行テキストが形成されていったと考えられる。この中断（放棄）と再着手に影響を与えたのがツァツォスとの論争ではなかったか。

VI

「アシネーの王」全60行は、「わたしたちが2年このかた探しているアシネーの王は／未確認のままではだれからもホメーロスにさえも忘れられ／イーリアスではたったひとつのあの不確実な言葉／黄金の葬祭用仮面のようにここに投げ出されている」（13-16）という仮面を、あたかもシュリーマンがミュケーナイの王墓から発掘した「アガメムノーンの仮面」であるかのように虚構し、「アシネーの王は仮面の裏の空虚」（20）というモチーフを導き出し、「仮面の裏には空虚」（26）を経て「詩人ひとつの空虚」（54）というもうひとつのモチーフを示し、「そのかれ（＝アシネーの王）をわたしたちはこのアクロポリスでこんなにも注意深く探している／ときには石の上に指でかれに触れたような感触を得ながら」（59-60）と締めくくられる。この詩は、詩的創造とその可能性について、また「ギリシア精神」についての省察である。この2つの省察を「空虚」κενόで結びつける⁽³⁰⁾。アシネーの王を探し求めることは、セフェリスにとって故国へ回帰する痛切な思い ή νοσταλγία του βάρους (49)にかられてのことであった。そしてアシネーの王をたしかに探し当てた。アシネーのアクロポリスの遺蹟に散乱する石に、詩人の触覚でアシネーの王をとらえたのである。その靈魂としての蝙蝠を通して視覚と聴覚による(55-58)よりも、おそらくいっそう明確にその存在を認識し確認した。同時に『ミスストリマ』を越えてギリシア現代詩の可能性を、創造の原点をとらえたことを知ったのである。έλληνικός έλληνισμός への信頼と自信をも、ここアシネーの遺蹟で確認したのであろう。

ヴィッティによれば、「アシネーの王」の技法としての比喩的な表現は

20 種類にのぼり、そのうちメタファーは 14 種類をかぞえる。これはセフェリスの作品の通例からすれば、きわめて顕著な特色である⁽³¹⁾。そしてキーリーによれば⁽³²⁾、そのことからイメージ群が錯綜し、何かを知らせるためのはずであるのに、あまりにも *obscure* に変形されすぎている。ただメタファーによってしか伝わってこないために、知的と言うより情緒的なままのイメージだけがテーマを曖昧に、不決定のムードの中に浮かびあがらせているだけにすぎない。すなわち、イメージがあくまでもレトリック過剰なのである。とくに 27-39 のイメージ群は、キーリーの批判もあながち無視できないほど非「知的」である。

27-39 の連続するメタファーは、一見して任意の、まさに手当たり次第とさえ思われる羅列であり、大胆というよりもむしろ危険（読者を退屈させるばかりか単調に陥る危機も含めて）なものとなっている⁽³³⁾。このために、「アシネーの王」が『航海日誌 I』の中で最高傑作とおおむね認められていても、それに賛同することにためらってしまうほどである⁽³⁴⁾。あるいはこれらのいくつかのメタファーには、たとえば「生の仮小屋」(34)、「若い女」(35-36)、「地の下の靈魂」(37)のように、それぞれ典拠が指摘されるものもある⁽³⁵⁾。しかし出典を明らかにしても、明快な筋道を追うことは不可能であり、セフェリス自身それを望まないはずである。エリオットの「合金」をここで想起すべきであろう。また、質の「濃密な」詩をここに認めてよいであろう。奔放なイメージから、「どこでもわたしたちと一緒の空虚」(31)の根源を知らせ、この作品にある緊迫感を与える「現代の悲痛」(39)の原因を示そうとしていることが了解されよう。こうしたイメージの奔放は、40-54 にも指摘できるかもしれないが⁽³⁶⁾、むしろこの詩のいたるところに見られるものであり、不可欠の要素となっているのである。

Ⅶ

「アシネーの王」の全体を覆っている「不確実さ、未決定」は、無調音楽を想起させる、何かある「とりとめのなさ」となって現れている。たとえば 40 行以下の *asyndeton* 構文の多用などを思いあわせれば、それがセフェリスの意図するところであったし、同時進行中のツァツォスとの論争を意識しての手法だと言えよう。キーリーの主張にもかかわらず、ヴィッティの言うように、この作品がセフェリスの最も代表的な、また解放的な *ánovxtrá* 詩のひとつであることにはかわりがないであろう。「代表的」とは、かれの主題を支配するモチーフを集約しているからであり、その独自の表現と気分がそこ

に組み合わされているからである。「解放的」とは、このようなセフェリスの詩の根本的な要素のすべてが増幅されていて、その結果としてかれの作品のいくつかに慣れた耳には容易に理解され得る作品だからである⁽³⁷⁾。

ツァツォスとの対話は、セフェリスに明確なひとつの詩論を形成させた。その結実のひとつが「アシネーの王」である。それまでの詩作の集大成としての性格を保持しつつ、『ミシストリマ』に代表されるかれの初期の作品群を超越した新たなギリシア現代詩の可能性を示すものとなっている。この作品は、たしかにひとつの実験であったが、『航海日誌Ⅰ』の中で最良のものであることには異論がないであろうし、ツァツォスとの対話が決定的な動機となったであろうこの実験が成功であったことをも立証しているであろう。同じ『航海日誌Ⅰ』に収められる「最後の日」は、「アシネーの王」と同時期に作られたが、ここにもツァツォスとの論争の影響は否定できないはずである⁽³⁸⁾。そうであれば、一見して不毛の論争とされそうなこの文学史上の事件にも、再評価しなければならぬギリシア現代詩の见えない一面が隠されているのではないだろうか。

注

- (1) N. Βαγενάς, *‘Ο ποιητής και ό χορευτής*, Αθήνα (1979), 13.
- (2) ツァツォスは後に保守政治家として活躍し、軍部独裁政権(1967-74)の崩壊した後の最初の大統領に選ばれた(1975-80)。
- (3) Δοκιμές, Α’82. 以下、ツァツォスの見解は、Λ.Κούσουλας (ed.), *Ένας διάλογος για την ποίηση*, Αθήνα (1988) 所収のテクストにより、セフェリスの場合は Δοκιμές, Α’による。
- (4) ツァツォスのこの『パラマス』は、1949年に第2版が出て、今日においてもパラマス研究の基本的文献とされている。
- (5) このことについては、Κ. Γ. Καρυωτάκης, *Ποιήματα και πεζά*, Αθήνα (1991) に付された編者サヴィディアスの解説に詳しい。
- (6) Κούσουλας, op.cit., 15’.
- (7) A.Leontis, *Topographies of Hellenism*, Ithaca (1995), 134f.
- (8) Βαγενάς, op. cit., 14.
- (9) Κ. Παλαμάς, *‘Απαντα*, vol. 12, Αθήνα (1967), 464-79.
- (10) Δ. Σολωμός, *‘Απαντα*, vol. 1, Αθήνα (1986), 12.
- (11) Παλαμάς, *‘Απαντα*, vol. 1, Αθήνα (1962), 213.
- (12) Ι. Τσάτσου, *‘Ο αδερφός μου Γιώργος Σεφέρης*, Αθήνα (1973), 218.

- (13) *Δοκιμές*, Β' 12f.
- (14) D. Kohler, *L' Aviron d'Ulysee. L'itinéraire poétique de Georges Séféris*, Paris (1985), 50ff.
- (15) *Ibid.*, 66ff.
- (16) *Ibid.*, 252ff.
- (17) Τσάτσου, *op.cit.*, 93f.
- (18) 「ニジンスキー」については、Βαγένας, *op.cit.*, 60ff.
- (19) Κούσουλας, *op.cit.*, 49.
- (20) T. S. Eliot, *The Use of Poetry and the Use of Criticism*, London (1972), 109.
- (21) *Δοκιμές*, Α' 87-89.
- (22) *Ibid.*, 32, 89f.
- (23) Leontis, *op.cit.*, 124f.
- (24) *Ibid.*, 135.
- (25) *Δοκιμές*, Α' 101.
- (26) 1940年の初版では、「最後の日」だけがメタクサス政権下の検閲のために削除されている。
- (27) *Μέρες*, ΣΤ' 55; *Δοκιμές*, Β' 203; E. Keeley, *Συζήτηση με τον Γ. Σεφέρη*, Αθήνα (1982), 65f; ditto, *Modern Greek Poetry*, Princeton (1983), 195.
- (28) 異稿についてはヤトロマノラキスに負うところが大きい。Γ. Γιατρομανωλάκης, *Ο ΒΑΣΙΛΙΑΣ ΤΗΣ ΑΣΙΝΗΣ, ή άνασκαφή ενός ποιήματος*, Αθήνα (1986).
- (29) 現行テキスト末尾の「アシネー、1938年夏」と第6稿テキスト末尾の「トロ、1938年9月」が示唆するように、セフェリスはエピダウロス近郊のトロに隣接するアシネーの遺蹟をこの時期に訪れたはずである。その実地見学の体験が第2グループの異稿群に取り入れられたと、またそれが新たな構想の基盤をなしていると想像してよいであろう。
- (30) Cf. Kohler, *op.cit.*, 586.
- (31) M.Vitti, *Φθορά και Λόγος*, Αθήνα (1989), 152.
- (32) Keeley, *Modern Greek Poetry*, 73, 84ff.
- (33) Vitti, *op.cit.*, 154.
- (34) Keeley, *Modern Greek Poetry*, 84. キーリーは、この一連のイメージに否定的な評価しか与えようとしなない。ちなみに、かれは『航海日誌 I』では、「物語」と「最後の日」を高く評価する。
- (35) D. Ricks, *The Shade of Homer*, Cambridge (1989), 167; Γιατρομανωλάκης, *op.cit.*, 46f.

(36) キーリーは、これさえも *obscure* として拒否する (*Modern Greek Poetry*, 84f.)。「最後の日」に高い評価を与えるキーリーには、「アシネーの王」との比較にやや強引すぎる傾向がある。

(37) Vitti, *op.cit.*, 157.

(38) 「対話」と「最後の日」との関連を暗示するものとしては、たとえば 1940 年 1 月 26 日の日記がある (*Méρες*, Γ' 165)。Cf. Δ. Δασκαλόπουλος, *Εργογραφία Σεφέρη (1931-1979)*, Αθήνα (1979), 53.

参考文献

L.Politis, *A History of Modern Greek Literature*, Oxford (1973).

Κ.Θ.Δημαράς, *Ιστορία της Νεοελληνικής Λογοτεχνίας*, Αθήνα (1983).

【附記】

紙幅の関係から割愛した「アシネーの王」そのものの検討については、次の拙稿を参照されるよう切望する。

伊藤照夫、「セフェリス『アシネーの王』の仮面について—ギリシア現代詩のひとつの可能性—」、『京都産業大学論集・人文科学系列』23、1996年3月（予定）。